福島県の広報誌は、創刊250号を迎えました！

250号

1970.8－2015.6

「ゆめだより」（ふくしま県民だより）が創刊されたのは昭和45年（1970年）8月。

「県民の皆さんとともにつくる広報誌」として歩み続けて45年。震災後、休刊期間がありましたが、おかげさまで250号を迎えました。本号はいつもと違う特別編成でお送りします。

今月の表紙

樹齢250年の十楽院のカヤの木に大玉村の皆さんが大集合！

大玉村の皆さん

中通り地方のほぼ中央、標高250メートルにある、小さくても輝く“大いなる田舎”大玉村。250号を記念して、村の皆さんに登場していただきました。村を250年間見守ってきたカヤの木に集まるたくさんの笑顔。『ゆめだより』は、県民の皆さんの笑顔と元気を応援し続けます。

あなたも表紙に登場してみませんか？
詳しくは9ページをご覧ください。

県広報誌45年の歩み

紹介できるのはほんの一部ですが、広報誌45年の歴史を振り返ってみましょう。当時、あなたは何歳でしたか？ どんな“ゆめ”を持っていましたか？

1980 昭和55年（6月1日発行）
表紙全面が皆さんの姿をとらえた写真に。「県民参加型の誌面」が確立されました。

1971 昭和46年（12月10日発行）
いち早くカラー化。只見線開通、東北新幹線路線決定など、発展を予感させる明るいニュースが。

1970 昭和45年（8月1日発行）
表紙は、福島一中サッカー部。36年後にJFAアカデミー福島が富岡町に開校。福島県とサッカーとの縁を感じます。

1984（第75号）　1980（第48号）　1976（第25号）　1971（第3号）（第4号）　1970（第1号）

1984 昭和59年（12月1日発行）
「21世紀を担う若者たち」農・商・工・医療・教育で活躍する若者を紹介。

1976 昭和51年（8月1日発行）
「立県100年の歩み」現在の形の福島県ができてからの各地方の歴史を特集。

1971 昭和46年（8月1日発行）
日本中で急激に進む宅地開発。「公害」が認識され豊かな自然と県民の健康を守る取り組みが始まりました。

知事メッセージ

皆さんの声に応える広報誌を目指して

福島県知事　内堀雅雄

「県民だより」が産声を上げてから、おかげ様で250号を迎えました。「ゆめだより」に名を変え、時代の移り変わりに対応しながら、県の取り組みや各地域の話題、頑張っておられる県民の皆さんの姿をお伝えしてまいりました。

伝えることと聴くことは車の両輪と言われます。県庁の本庁舎に掲げられている福島県庁の「庁」の漢字は、【廳】という旧字が使われており、「聴く」という字が入っています。私たち職員は「県民の皆さんの声を丁寧に拝聴しながら、県の姿を分かりやすく伝える」という気持ちで日々の業務に当たらなければならないと考えております。

「ゆめだより」は、今後とも皆さんの声にしっかりと応え、復興に向けて果敢にチャレンジする福島の今を発信してまいります。

毎号楽しみにしています。内堀知事さんにはとても期待しています。大きな都市だけでなく地方の小さい市や町、村が活気づくよう遠くに目を向け、まわりが元気になりますように。（白河市 60代 女性）

200号の表紙を飾った舟木さんにその後を聞きました!（ページ下）

第250号

2015 平成27年（6月1日発行）

内容をよりパワーアップさせて、これからも皆さんの「ゆめ」を届けます!

特別号

2011 平成23年（8月1日発行）

震災により、災害相談窓口のお知らせなど、県民の生活に直結した内容で発行再開。

第200号

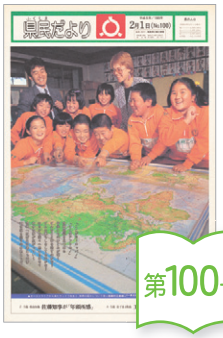
2005 平成17年（10月1日発行）

200号記念特集は「県庁探検」。針生（はりゅう）小学校（現・南会津町立檜沢小学校）の皆さんが県庁をレポート。

第151号

1997 平成9年（8月1日発行）

「うつくしま未来博」の開催を5年後に控え、各パビリオンを紹介。



第100号

1989 平成元年（2月1日発行）

平成最初の発行が100号に。英語クラブの先生が外国人として初めて表紙に登場。

2015（第250号） 2012（第231号） 2011（特別号） 2008（第216号） 2005（第200号） 2003（第187号） 1997（第151号） 1992（第119号） 1989（第100号）

第231号

2012 平成24年（4月1日発行）

「ふくしまから はじめよう。ゆめだより」に。表紙に子どもたちの笑顔が戻りました。

家族みんなで楽しめる誌面に!

第216号

2008 平成20年（6月1日発行）

「ゆめだより」とひらがなに表記に。お子さんと一緒に読める「マンガでわかる」コーナーが登場。

第187号

2003 平成15年（8月1日発行）

県民の皆さんから募集した506作品の中から選ばれた「うつくしま夢だより」に。

第119号

1992 平成4年（4月1日発行）

「平成7年ふくしま国体」キャラクターの愛称を募集。名前が決まる前の「キビタン」が初めて誌面に。

250号記念インタビュー

道の駅 からむし織の里しょうわ
駅長 舟木（ふなき） 容子（ようこ）さん

織姫になって

10年前、からむし織の織姫として取材してもらった当時、帯を作ることが夢で、糸から紡いで織って……。1年かけて完成しました! でも、気づいたんです。織物は得意じゃないかも、って。「もっと全国の皆さんに、村の人たちの作品や昭和村を知ってもらえるような裏方のほうが向いているんじゃないかな」と思ったんです。

“自分のゆめ”から“みんなのゆめ”へ

4年前に織姫を少し離れて、村の農業関係の仕事をしました。過疎化・高齢化の課題に気づかされ、「からむし織を伝えるだけではいけない」と考えるようになりました。

今年から「からむし織の里」に戻ることになり、村の皆さんから「戻ってきてくれて良かった」と言われて本当にうれしかったです。今の目標は、駅長として、村の皆さんと訪れたお客さまを結ぶ役割を果たすこと。それと、娘の来年の成人式までに帯を織ることです!

チャレンジを続ける昭和村の皆さんを応援したい

この10年で、村の皆さん(からむし織生産者)も少しずつ自分の作った商品に自信を持って、自らアイデアを出すといった進化が起きています。この進化を大切に育てて村の活性化につなげるようにしたいです。ぜひ、村に来て肌で感じてください。そして、織姫のように、どんなことでもチャレンジしてみてください! 行動することで自信につながるし、もっと人生が楽しくなると思うんです。

読者からのお便り 自分は、福島県を（できる形ですが）旅行したり、県産品を食べたりして応援しています。4月号を見たら「249号」。6月号では「250号記念企画」をやってほしいです。（東京都 40代 男性）

福島の未来を拓く

内堀知事、高校生の疑問に答える

時折ジェスチャーを交えながら語りかける内堀知事

相馬高新聞

ゆめだより 250号記念

4月下旬、公務の合間を縫い、内堀雅雄福島県知事が相馬高校出版局のインタビューに答えた。相双地方の高校生が抱える悩み・県政への疑問を知事に率直にぶつけた。

地域産業を再生させ、より一層の女性の活躍を進める

3年生になると進路が気がかりです。将来は地元に就職したいと考えていますが、相双地方の就職先は震災前より

も減っているのではないかと心配です。

（松本（まつもと） 真奈（まな）・3年）

（知事）雇用の確保については、二つのことが重要です。一つは地域産業の再生。もう一つは企業立地です。まず、地域産業の再生については、事業を再開したり継続したりするための費用の補助や資金繰りを支援していきます。企業立地については、再生可能エネルギー関連やロボット産業など新しい産業の企業立地や設備投資を支援していきます。

また、テクノアカデミー浜において、相双地方の復興を担うものづくり人材の育成や民間企業などとの連携による教育を充実させて、産業集積に必要な人材の育成、確保を図っていきます。

さらに、女性の活躍を促進することも課題の一つです。そこで、今年度から働く女性を応援する中小企業の認証制度を新たに創設したり、女性の起業家の育成を図るなど、女性の活躍を一層進めていきます。

子育て・医療体制の強化は、福島県全体の課題

（和田山）女性にとってはうれしいことですね。次に、女性として心配なのが、医療と育児施設です。少子化対策は震災後の相双地方では深刻だと思っています。どのような政策をお考えですか。

（知事）4月から新たに設置したこども未来局を中心として子ども・子育て支援と青少年の育成を一体的に推進していきます。

具体的には、18歳以下の医療費無料化を継続し、安心して妊娠、出産、子育てができる医療体制の強化、女性が活躍できる働きやすい職場環境づくりの推進に取り組んでいきます。

周産期医療体制の強化については、県立医大に委託して、「周産期医療人材養成支援センター（仮称）」を立ち上げ、周産期医療を担う医師の養成や「周産期母子医療センター」の支援を行います。

また、「（仮称）ふくしま結婚・子育て応援センター」を整備して、結婚・妊娠・出産・子育てのライフステージに応じたさまざまな事業を実施していきます。

「福が満開おもてなし隊活動紹介」の相馬スマイル応援スタンププロジェクトチームの記事を読んで、「同じ相双地区の高校でこんな活動をしているんだ」と誇らしく感じます。しかし、記事が小さすぎると思います。（南相馬市 10代 女性）

読者からのお便り

「誰もが福島に生まれたこと、住んでいることを誇りに思える」県づくりを

私は地域の医療体制が心配です。相双地方の病院は、診療科によって医師がいない曜日があったりして、通院するのに授業を休まなければならないなど影響が出ます。若い世代が地域に定着するには、産婦人科や小児科などの医療体制整備が不可欠だと思います。

（波多野 未穂・2年）

（知事）医療体制の強化は、浜通りだけでなく福島県全体の課題です。「浜通り地方医療復興計画」に基づいて、浜通りの医療の充実に取り組んでいきます。具体的には、県立医大が県外からの医師を確保し、各地域に派遣する取り組みを支援していきます。

労働環境の改善に取り組む医療機関への支援や、看護の分野から一度離れた人に対する再就業研修を実施して看護職員の確保を促進していきます。

また、被災地域の医療現場を体験する研修ツアーの対象者を皆さんの年代である高校生にも拡大し、開催回数を増やして、看護職員の確保・定着に取り組んでいきます。

（和田山）私の友人が看護師を目指しているので、ツアーの対象に高校生も加えていると聞いて、とてもうれしいです。

私たちはお年寄りにお世話になりながら育ってきました。それが震災後の避難などで同居することが困難になっています。知事は「家族3世代で仲良く安心して暮らせるまちづくり」についてどのように考えていますか。

（佐藤 志帆・2年）

（知事）大事な課題ですね。福島県には、豊かな自然、人と人のきずなを大事にする地域社会、伝統文化やさまざまな地場産業のほか、未来を担う子どもたちなど、誇るべき多くの宝があります。

地域に今あるものを掘り起こし、知恵と工夫でしっかりと磨き上げるとともに、県民の皆さん、市町村、企業などと一緒に連携しながら地域の活性化に結び付けていくことが重要だと考えています。

さらに、教育環境の充実、再生可能エネルギーや医療関連産業など新産業の創出、子育てしやすい環境づくりなどにも取り組み、こうした全体の施策を進めていくことで、福島に生まれたこと、住んでいることを誰もが誇りに思える福島県を創っていきたいと考えています。

（和田山）最後に。お忙しいと思うのですが、毎日遅くまで勤務されているのでしょうか。

（知事）東京に出張した時などは、朝7時くらいに出かけて、戻るのが23時を過ぎることもあり、一定はしていませんね。県庁を離れていても、スマートフォンやタブレット端末で情報が入ってくるので、常に、福島のことを考えて仕事をしています。

福島県は他の県にはない原子力災害があって、それを乗り越えるために、数多くのことをやらなければ前に進みません。私自身が知事としてやるべきことがたくさんあって、それを一つ一つ懸命にやっていく。本当にあっという間の半年間でした。

左から 記録：大谷 亘（1年）、写真：鈴木 瑠（1年）、内堀知事、インタビュアー：和田山 きらり（1年）、顧問：武内 義明

後記 聞き取りを終えて

和田山 きらり（1年）

初めての取材が県知事インタビューで緊張しました。知事が気さくな方で私たちに親切に接していただいたおかげで無事に終えることができました。知事を前にするとあせってしまって変な質問もあったかもしれません。また、声が小さい場面もありました。相手の答えに臨機応変に対応していくことが必要なので、注意深く話を聞いたつもりです。自分の知らない言葉が次々に出てきてまとめるのに苦労しました。多くの課題、反省点を今後の活動に生かしていきたいです。

■県立相馬高校出版局

震災35日後の始業式に、混乱の中で学校新聞を発行し、平成24年全国高校新聞コンクールで文部科学大臣奨励賞を受賞。震災後は全国高校文化祭への参加、神戸鈴蘭台高校、福岡修猷館高校、彦根東高校などと交流。全国に向け「福島の今」を発信している。

新コーナースタート!

あなたの周りの「学園自慢」を大募集！

Check!

「ゆめだより」は、「新しいことを始めた」「全国大会に向けてチャレンジしている」など、児童・生徒の活動を応援しています。あなたの周りで、頑張っている児童・生徒の皆さんはいませんか。自薦・他薦を問わず、「学園自慢」「活動報告」を募集します。学校・学年・クラス・部活動・サークル単位の応募はもちろん、個人の立候補も大歓迎。奮ってご応募ください。

応募方法

郵便はがきに、住所・氏名・年齢・電話番号・「新しく始めたこと」や「頑張っていること」をご記入の上、ご応募ください。採用の方には、後日ご連絡の上、取材させていただきます。

郵送先

〒960-8670 県庁 広報課「学園自慢」係

お預かりした個人情報は、記事や取材などにのみ使用いたします。

Eメール・ファクスもOK! 16ページをご覧ください。

読者からのお便り 知事のある一日を特集してほしい。どのような仕事をしているか知りたい。これからも魅力的な情報の発信をよろしくお願いします。（福島市 20代 男性）

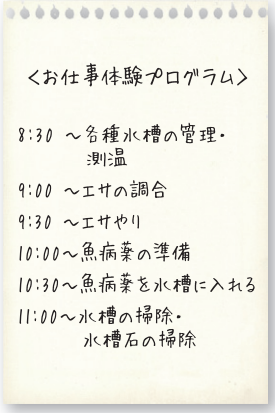
スペシャル

子どもたちの“ゆめ”をかなえる人気コーナー“みんなのゆめ”がパワーアップ!
今回は“みんなのゆめスペシャル”と題し、“ゆめをかなえたい”子どもを、
“ゆめをかなえ、プロとして第一歩を踏み出した“若者が応援します。

飼育員になりたい！

後藤優太郎（ごとうゆうたろう）さん
（小学2年生）

一人目は、本宮市の後藤優太郎さん。魚が大好きで家族で巡った水族館は18カ所以上という優太郎さんの、「アクアマリンふくしまの飼育員になりたい！」という夢をかなえます！



名前入りの「一日飼育員バッジ」をつけ、4月に配属されたばかりの新人飼育員の村井さんと一緒にお仕事体験スタート！

村井さん　今日はよろしくお願いします。
優太郎さん　よろしくお願いします！

迷路のような職員専用通路を通って水槽へと移動します。狭い通路や階段を行ったり来たり。

村井さん　水槽がたくさんあるでしょう。一人で管理するのは大変だから、みんなで分担してお魚の世話をしてるんだよ。まずは水の温度を測ります。温度を読んでもらえる？
優太郎さん　えーっと、25・2℃です。
村井さん　ありがとう！

大好きな魚や生き物を食い入るように見る優太郎さん。村井さんに教えてもらいながら、水槽の電気をつけたり、元気がないお魚がいないかチェックします。

村井さん　ここには何回来たの？
優太郎さん　何十回も来ました！
村井さん　どんな魚が好き？
優太郎さん　ハリセンボンが大好きです。一度飼ったことがあって、すごく面白いです。
村井さん　そうなんだ。今は展示していないんだけど後で見せてあげるね。
優太郎さん　はい！

最初は緊張していましたが、村井さんと一緒にお仕事するうちすっかり夢中に。次はエサの調合とエサやりです。

村井さん　魚の大きさに合わせて調整します。エビやお魚をみじん切りにしたり、大きな魚用にイカをざく切りにしたり。さっそくやってみよう！
優太郎さん　はい！

ウツボがなかなかエサを食べてくれず、心配になった優太郎さん。じ～っと、ウツボの水槽を見つめていました。

エサやりのあとは、きれいな魚たちを見てもらえるように、水槽のガラスを磨いたり気泡を取り除いたり。優太郎さんも水槽内の石の掃除にチャレンジ！汚れを落とそうと一生懸命ブラシで磨きます。

ピッカピカになった水槽に優太郎さんも満足気。
最後に「飼育員体験 修了証」の素敵なプレゼントが！

――感想を聞いてみました。

優太郎さん　すごく楽しかったです！温度計が見えないところにあったり、エサの種類がたくさんあってびっくりしました。掃除は大変だったけど、前よりもっと魚が好きになりました。
村井さん　測温やエサやりも上手だったよ。これからも生き物と触れ合って、飼育員目指して頑張ってね！

「将来は魚に詳しい飼育員になって魚博士を目指したい！」と、優太郎さんの夢はますますふくらんだようです。

村井さんにお話を伺いました

環境水族館アクアマリンふくしま
飼育員　村井理沙（むらいりさ）さん
<プロフィール>
岐阜県出身。テレビで見る海や魚が泳ぐ姿などを見て興味を持つように。大学で海洋生物について学び、今年4月、アクアマリンふくしまへ飼育員として入社。「研究を続けたい」という夢の入口に立ちました。

――優太郎さんと一緒に回っていかがでしたか？
村井さん　魚について本当に詳しくて、大好きなことが伝わりました。飼育員としても頼もしかったです。

――これから、新たにチャレンジしたいことは？
村井さん　新人なので、まずはお客さまの質問に答えられる飼育員になれるよう経験を積んで、将来は運営する側としても勉強していきたいです。

ありがとうございました。これからも応援しています！

みんなのゆめ

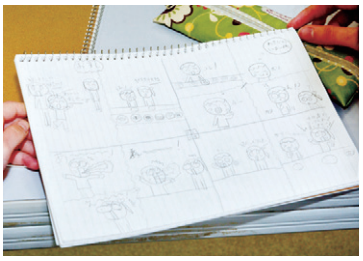
まんが家になりたい！

河合優羽（かわい ゆう）さん
（小学5年生）

二人目は、本宮市の河合優羽さん。優羽さんの将来の夢は「まんが家になること」。そのためにまんが家さんに会っていろいろ聞いてみたい！ ということで、現在「なかよし」で連載中の長谷垣なるみ先生にご協力いただきました！

目をキラキラさせた優羽さんは、「今日はよろしくお願いします」と先生に花束を渡してごあいさつ。

3歳くらいから絵を描くことが好きで、小学校からまんがを描くようになった優羽さん。書き溜めていたスケッチブックを先生に見てもらいました。



優羽さん 人物を描くとどうしても同じ感じになっちゃうんです。特に男の子がむずかしくて……。

長谷垣先生 私も小さいころは男の子はむずかしかったな～（笑）。模写をするといいですよ。実際に俳優さんを描いてみたりすると上達も早くなると思うよ。

優羽さん そうなんですね！

長谷垣先生 タイトルや構成は、どんなところからアイデアが出るの？

優羽さん 家族の話だったり、こうだったら面白いかもって思ったことをお話にしています。

長谷垣先生 お話の起承転結をしっかり考えてるね。すごいっ！

ここで実践です。二人でホワイトボードに向かい、まずは、悩みの男の子の描き方から。

優羽さん やっぱりむずかしいです……。

長谷垣先生 目や眉の位置を変えるだけで、キリッとした男顔に変わるよ。

優羽さん 本当だ！ 全然ちがう！

さて、男の子が描けるようになったので、今度は先生と合作で4コマまんがを完成させることに。

優羽さん んー、何がいいかな～。

長谷垣先生 優羽ちゃんと会った記念に私たちのことを描こっか？

優羽さん うん！

相談しながら、まんがを描いていく二人。

下書きが完成した後は、先生愛用の色ペン「コピック」でキレイに色付け。なんと2時間足らずでステキな4コマまんがが完成しました！

先生からサイン入りの単行本「利根川りりかの実験室」をプレゼントされ、大喜びの優羽さん。

――感想を聞いてみました。

優羽さん 今日お会いして、もっともっとまんがを描きたくなりました。将来まんが家になったら、ぜひ先生に見てもらいたいです！

長谷垣先生 まんがに対するやる気やこだわりがすごいと思います。好きな気持ちを忘れずに、これからも続けていってね。

先生からエールをもらった優羽さん。福島県からもう一人、まんが家が誕生する日を楽しみに待っています。

長谷垣先生にお話を伺いました

まんが家 長谷垣（はせがき）なるみ先生

＜プロフィール＞
福島県出身で現在も県内に在住して執筆活動中。15歳の時に月刊少女漫画誌「なかよし」（講談社）に投稿し、「ディア→ディア！」でデビュー。また、17歳で同誌の連載作家になるなど、10代では異例の大抜擢となった。

――優羽さんと一緒に作品を描いてみていかがでしたか？

長谷垣先生 夢がかなうというのは素敵なことですね。読む人の気持ちに寄り添おうとする優羽さんの考え方がとても印象的でしたし、それは表現者にとってとても重要なものだということを、改めて感じることができましたね。

――これから、新たにチャレンジしたいことは？

長谷垣先生 作品を通して、いろいろな気持ちを伝えていきたいですね。これは、常に私の中である言葉で、永遠の課題なんです……。

ありがとうございました。先生の連載を楽しみにしています！

読者からのお便り

「未来を拓く予算」の13の重点プロジェクトはとても明確で理解できました。ただ、高齢者が増加しているので施設の充実や介護者の賃金アップについても検討していただけたらと思います。（いわき市 50代 女性）